

# 大正自由教育における幼稚園教育に関する一考察 —成城幼稚園の創設とその位置付け—

谷 脇 由季子

## はじめに

本稿は、戦前における成城幼稚園がどのようなものであったのかについて明らかにするものである。

成城学園は、いうまでもなく 1917（大正 6）年に沢柳政太郎を創立者として新宿牛込の成城中学校の一隅に誕生した成城小学校から始まる。成城小学校には有能かつ意欲的な教師たちが集まり、初等教育の研究に邁進すると同時にその研究成果を授業の公開や雑誌の発行という形で積極的に発表することによって、全国の教師たちに影響を与えようとしてきた。初期の成城小学校の教員たちの研究とそれに伴う実践は、現在の教育に対しても、非常に有効な示唆を与えるものとして重要なものを含んでいる。またその自由な校風は、子どもたちに本来の明るさを、教師たちには自分の研究を十全に行う雰囲気をもたらしした。成城小学校の創設趣意書に現れる「研究を基とする教育」は、沢柳がかつて東北帝国大学で行った研究第一主義の小学校版ともいえ、初期の成城小学校は、沢柳が思い描いた通りの初等教育の研究学校として大正自由教育の旗艦的役割を果たしていたといえる。

しかし一方で、その自由な雰囲気はおのずと子どもたちに学校の授業に対する緊張感を減退させ、しかも教師たちの研究はいわゆる上級学校への受験に即応するものではなかった。そのため、保護者たちは、子どもたちの学年が上がるにつれて上級学校への受験という目の前の問題をいかに解決するかが重要な課題となった。小原の回想によると、沢柳は 6 年生の段階で受験に対応するために退学者が激増したことに対して、「いいでないか、最後に一人、残れば」と話していたようであるが<sup>(1)</sup>、沢柳にとっては、教師たちによる教育の実験を行い、日本

の教育の改革を行うことが第一であって、子どもたちの進学は個人の問題としてコミットすることを避けたのであろう。成城小学校の「研究を基とする教育」と東北帝国大学の「研究第一主義」は、沢柳の中では同一線上にある考え方であった。しかし、小学校は大学と異なり、卒業後の進学という問題が生じる。もちろんこの点は、小学校の改革という目的からは外れることであるので、沢柳の意識には上らなかったと考えられる<sup>(2)</sup>。そこにはある種の潔さすら感じさせる。だが保護者には、子どもたちにこの自由な教育を享受させたいが、同時に大学まで進学させたいという二律背反的な思いがあり、このことが、保護者をして上級学校の設立を希望させたといえよう<sup>(3)</sup>。

さて、その沢柳の考え方と全く異にする学校観を持っていたのが、小原国芳である。小原にとっては目の前の子どもたちの進学問題も含めて一貫した教育であり、そもそも教育というのは小学校あるいはそれ以前の幼稚園の段階から大学に至るまで連続性をもって行うべきであると考えていた。それが彼の言うところの「マコトの教育」であったといえる。その実現のために小原は東奔西走した。成城学園が現在のような総合学園として成立したのは、確かに小原の功績が大きい。また、すでに拙稿「成城学園の女子中等教育」（2014年）において明らかにしたように、現在の成城学園の校風は、小学校や七年制高等学校というよりも、成城高等女学校の校風が原型であり、これも小原の強い意思で創設されたものである。

ところで、成城学園の全体像を歴史的に明確化するには、小原が高等女学校と同様に設立を切望していた成城幼稚園も視野に置く必要があろう。だが、これまで成城学園の年史類において、幼稚園についての執筆は非常に少なく、学園の中でのその位置づけもあまり高いとはいえない。だが高等女学校と同じ比重で小原が切望し、沢柳が再三反対したにもかかわらず創設した幼稚園は、当時としては新しい試みであったリトミック教育の日本における第一人者であった小林宗作を初代の主事として迎えただけでなく、ごく初期の段階ではあるが、幼児教育の研究もなされていた<sup>(4)</sup>。

従って本稿では、小原が沢柳の反対をおしてまで作った成城幼稚園が、どのような意図の下に創設され、それがどのようなものであったのか、さらに戦前においてどのような存在として学園の中で扱われていたかについて明らかにすること

を目的とする。また、その時代背景としての大正自由教育の中で、成城幼稚園がどのような位置づけになりうるのか、さらには国民教育としての初等教育の場である小学校と就学前教育の場である幼稚園との連携についても考察するものである。

なお、2012（平成 24）年、旧制成城高等学校教員、成城小学校主事を歴任し、戦後、成城学園法人事務局長となった小宮巴氏が着任直後からずっと保存・整理していた学園関係の文書資料の目録が、成城学園教育研究所において作成された。今回、その貴重な史料を使うことにより、これまで年史あるいは個人の評伝や自伝でしか明らかにされなかった成城幼稚園の様子について少しずつ明確に見えてきた。本稿では、これらの新史料を使って、より鮮明な成城幼稚園の姿を明らかにしてみようと思う<sup>(5)</sup>。

## 1. 大正自由教育の幼稚園教育への影響

そもそも大正自由教育は、本来的には初等教育の改革であり、それは明治期のヘルバルト主義的な初等教育からの転換を目指したものである。それはつまり、中野光が次のように定義づけるように、「主として大正期において、それまでの「臣民教育」が特徴として画一主義的な注入教授、権力的なとりしまり主義を特徴とする訓練に対して、子どもの自発性・個性を尊重しようとして自由主義的な教育」<sup>(6)</sup>であり、成城小学校はまさにそうした大正自由教育を牽引する存在であった。

『幼稚園教育百年史』によると、1976（明治 9）年に我が国で最初の幼稚園である東京女子師範学校附属幼稚園（お茶の水女子大学附属幼稚園の前身）が開設して以降、「日々欧米における幼稚園での恩物主義の保育を模倣しており、これを模範として各地」の幼稚園において保育が行われていた<sup>(7)</sup>。そして「日々の保育は、四時間を三〇分前後の時間に区切って、各保育項目を指導したようである。例えば、室内会集、遊戯室での唱歌、又は体操、開誘室での修身話が庶物話、さらに、開誘室の恩物や積木、遊戯室での遊戯や体操などである」と紹介されているように、かなり画一的な内容であったようである<sup>(8)</sup>。その後、次第に幼稚

園は制度的にも整えられ、1899（明治 32）年に出された幼稚園保育及設備規程により、初めて法令としてその内容や設備に関して示されることとなった。しかし、幼稚園に対する法的な規程は、小学校令とその施行規則の中に示されるのみにとどまり、単独の勅令としては規定されてこなかった。それが 1926（大正 15）年に幼稚園令が公布されたことによって、「教育制度上における幼稚園の地位が確立し、その整備が一層図られた」のである<sup>(9)</sup>。

その内容についても、フレーベル主義の翻訳的な保育から次第に日本の実情に合ったものに変化した。前述の幼稚園保育及設備規程では、保育内容は遊戯、唱歌、談話、手技の四項目とされ、その内容や指導上の留意点などが事細かに指示された。しかし、1911（明治 44）年の小学校令および小学校令施行規則の改正により、そうした指示がすべて撤廃された。この改正を受けて出された「小学校令並ニ小学校令施行規則中改正ノ要旨」（文部省訓令第 13 号）では、次のように、幼稚園における保育と小学校以上の学校教育との本質的な違いを明らかにした上で、保育が画一的になることの懸念を述べている。

幼稚園ニ於ケル保育事項等ヲ小学校ニ於ケル教則其ノ他ノ如ク画一ニ規定スルハ却テ保育ノ進歩発達ヲ促ス所以ニアラサルノミナラス往々ニシテ保育ノ本旨ヲ誤ルノ虞ナキヲ保セス<sup>(10)</sup>

さらにこのころには、欧米における新しい教育の潮流である児童中心主義や自由主義の教育の多大なる影響を受け、幼児教育思想も保母中心の活動から幼児の自由な活動を尊重するという指導へといったものに変化していった。その中で、さまざまな幼稚園における保育実践が展開された。その後 1926（大正 15）年の幼稚園令施行規則において、保育内容は「遊戯、唱歌、観察、談話、手技等」と変更され、幼稚園ごとにより自由度の高い保育が可能となった。

もちろん、幼児教育に対する大正自由教育の影響もまた大きく、「児童の自発的活動を重視し、これまでのフレーベル主義の幼児教育法が作為的であり、外から押し付けるきらいがあつて、幼児の自然な活動には適切でないとして、幼児の自然な活動を主体とする遊戯を保育の中心とすることを主張」するものであった<sup>(11)</sup>。つまり、国民教育として画一的な教育から逃れることが困難であった小学校とは異なり、国民教育ではない幼稚園においては、学齢期の児童と就学前の

幼児との発達上の相違を認め、自由な子ども中心的な保育の方法が研究され、展開されていたことがわかる。

成城幼稚園も、そうした幼児教育の潮流の中で、しかも大正自由教育の旗艦的存在である成城学園の中でその校風をダイレクトに受けながら、開設されたのである。

## 2. 成城幼稚園創設とその保育

### (1) 小原国芳の「大成城」の「夢」

『成城学園五十年』（以下、『五十年』）によると、成城幼稚園は、学園内にあった小原国芳の私邸の応接間と庭を開放して、「成城学園につとめている職員の子弟、五、六人」を集めて始まったことになっている。『成城学園六十年』（以下、『六十年』）においても同様の記述があり（園児の数は「六人」となっている）、教職員の子どもを預かる場として始まったようである。事実、『六十年』では「保育園」と称する部分もあり、幼稚園と保育園との差異を意識していなかったようである<sup>(12)</sup>。

主任は、成蹊小学校訓導であった小林宗作<sup>(13)</sup>であり、彼は、当時すでにダルクローズ式リトミック教育の第一人者として名をはせていた。小原は、「わたしたちの幼稚園」と題した文章の中で、当時成城学園で音楽を担当していた眞篠敏雄から推薦されたことで小林のことを知ったことを明かしている。小林は、リトミック教育を中心とした新しい幼稚園の設立を希望しており、早速会った二人は意気投合した。

会って、君の幼稚園論を聞いてみると全く共鳴してしまつたのです。私もかねて、日本の多くの幼稚園に飽き足りなく思つて居りましたし、多少の夢と合致しますので、早速、二人は結びつくことが出来ました<sup>(14)</sup>。

小原は、かねてから幼稚園設立の希望を持っていた。当時の小原によると、沢柳が、ただでさえ経営の苦しい中で、砧に小学校を作ることすら反対していたことを承知しつつも、彼自身は「しかし！学園村を作り上げて行くに、どうして、幼稚園と小学校と女学校がなくてすみませう！」と、自らの主張を曲げることは

しなかった。さらに「むしろ中学や高等学校は遠方へ通へても、幼稚園と小学校と女学校だけは特に学園内に欲しい。その学園村の経営から生まれてくる利益が中学校高等学校の創設費の主なるものである以上、経営上からも、どうしても幼稚園や小学校をゼヒ作らねばならない運命に陥つてしまつたのです」と、彼なりの論理を展開し続けていた<sup>(15)</sup>。

小原にとって、幼稚園から大学までそろった成城学園の設立はまさに「学園村」をつくるという壮大な「夢」であつた。彼は当時「砧村」と称していた成城学園周辺を「学校中心の成城村」「学校村」<sup>(16)</sup>（後には「学園村」と統一する）として発展させようとしていた。

この時期は周知のように1923（大正12）年の関東大震災後の混乱期であり、田園都市構想のような郊外への発展の機運が高まっていた。成城学園の砧移転もそうした動きの一例として見ることができる。小原は、その機運に乗じて「日本のケムブリツヂを夢みて」<sup>(17)</sup>、困難を顧みず、土地の買収と分譲に邁進した。その結果、1925（大正14）年4月12日の成城玉川小学校の開校式を無事に迎えることとなった。さらに、同年5月にはとうとう幼稚園の開設にこぎつけたのである。

しかし、正式な幼稚園という形にはできず、「止むなく、おかしなコツテイジをこしらへて仮の住ひとして、その下座敷の戸をはづして広間になるやうにして」、半ば強引な、見切り発車的な開始であつた<sup>(18)</sup>。最初期には、小林を幼稚園の主任とし、その助手として日本女子大学校を卒業した林和子を迎えた。

しかし、その後も沢柳は幼稚園に対しては懐疑的な見方をしていたようである。小林宗作は、「幼稚園教育の可否に就て」において、次のような沢柳の発言を紹介している。

私が（博士）且つて文部省に役人をしてゐた時、全国の各府県に命じて幼稚園教育に対する調査をした事があつた。その時の多数の意見は幼稚園教育を有効（？）と認めてゐない、それ故にと言ふわけでもないが、私は幼稚園はなくてはならないと言ふ程には考えてゐなかつたのであるが、近頃雑誌等で見ると英国でも此頃は入学前の教育に余程意義を認めて来て其の設立を国家が奨励してゐる様であるから、追々には適当な人さへあれば、初めてもよい

と思ふ<sup>(19)</sup>

沢柳のこの言葉に対して小林は、「私も現代多くの幼稚園のなしつつある保育法とその実際には満足出来ない。だからこそ私が幼稚園を経営して見たい希望を持つたのでありますから、成城幼稚園も私の考へる様に経営さしていただければ、今迄先生のご覧になつた幼稚園とは異つたものが出来る事になる」と訴えたが、沢柳の「否定的な考へはなかへ動いた様子もなかつた」と述懐している<sup>(20)</sup>。

この論文が『教育問題研究・全人』に掲載されたのが1929(昭和4)年4月であり、小林は「三年ばかり前の或夜」のこととして紹介しているので、おそらくこの話は、大正15年頃であろう。つまり、幼稚園が見切り発車して間もない時期であると推測される。だから、この時期、沢柳が幼稚園に対して反対あるいは積極的に行うべきでないとの意思を示していたことがわかる。

さらに、小原もまた告白するように、そこには金銭的な問題もあった。沢柳にとって、私立学校を経営するためには、莫大な資金が必要であることは当然の認識であった。これは、文部官僚時代の初期にすでに彼自身が『公私学校比較論』(1890年)で述べていたことであり、それは終生変わらなかった。本当に良い教育を施そうとすれば、それなりの設備や敷地、もちろん人材も必要である。それらを満たすほどの資金の用途や計画性がなければ、日本の教育改革は出来ないし、結果的に子どもたちにより良い教育を施すこともできないと彼は考えていた。その意識は、自分の近い人間に対してもすら徹底していた。中野光は、沢柳が帝国教育会の専務理事であつた野口援太郎や成城小学校幹事であつた赤井米吉がそれぞれ池袋児童の村小学校や明星学園を創設する際も反対したことについて、「学校の創設とその運営には社会的な責任がともなう、と自覚していたからであろう」と評している<sup>(21)</sup>。

沢柳自身、それと同じ覚悟と責任を自らに課していた。「澤柳政太郎私家文書」には、開校当初の成城小学校の児童数や収支の予測といった学校運営上の具体的な事柄についてのメモ<sup>(22)</sup>が残されている。『澤柳政太郎私家文書目録』の「解題」では、これらは「どちらも大正6(1917)年前後の史料であり、学級定員数を決定するに際して、3つの案をシミュレートし、その収支決算を予測していたことをうかがわせ」るものであり、そこから「成城学園では約5年での黒字転換を計



画していた」<sup>(23)</sup> ことがわかる、と、このメモの重要性を指摘する。沢柳にとって学校を創設することは、それほど覚悟と責任を伴うものであり、教師が自己の理想とする教育の実践や夢のために安直に創設するものではないと考えていたのである。

にもかかわらず、小原は自身の「大成城」の夢に向かって学園の拡張に邁進したのである。

## (2) 成城幼稚園の設立と認可

このようにして、小原の独断によって強引に始められた幼稚園であるが、もちろんこれは、正式な幼稚園として認可を受ける必要があった。そこで、「いつお許しを得ようかと苦心した」末<sup>(24)</sup>、1927（昭和2）年9月、沢柳の最後の洋行の出発直前に直談判した。その様子を、小原自身が次のように述べている。

実は、最後の御洋行の御出発の朝だ。山のやうな見送り人、無数の人々から挨拶を受けて居られる校長、トテモ僕も話す機会は容易でなかつた。幸ひ改札口をは入つて、プラツトフォームまで出る、あの暗いトンネルを歩く二三分間だけが、校長先生へ、僕一人で話せる時間だつた。人はズルイやうに思ふかも知れないが、その時に、簡単にお許しを得たのだ。小学校の移転問題も、山下君と校長との間の建築様式問題でも中々お許しがなかつたので、設計図を必ず出せといふことだつたので、あの暗いトンネルで、簡単に見て頂いた。幼稚園も外から寄附でもあつたら作つてもいゝと許して下すつた。<sup>(25)</sup>

小原自身、こうしたやり方について「先生も、或は「ヒドい男だ、ドサクサまぎれに納得させ居る」と思はれたかもしれない」と思つてはいたようだが、どのような状況であれ、校長である沢柳の言質を取ったことに意を強くしており、さらには「もつとへ、皆が僕の独裁を嘉納してくれねばいかぬよ。ムツソリニエ式を許してくれねばいかぬよ、今暫らくの間だ。事の完成するまで、どうせ混沌時代は専制政治だ」と開き直るのである<sup>(26)</sup>。

できあがった学園の姿を沢柳が見ることになるのは、帰朝した11月のことだった。その様子を、「オルスの間に運動物が広がり、東の丘に幼稚園から小学校が



立ち並び、森を以て囲まれ、小川が貫通した光景を、サスガの校長も、メツタに色に表さぬ先生でしたが、どう見ても喜んで下すつたです」と小原は述べている<sup>(27)</sup>。そしてその翌月、12月24日に沢柳は帰らぬ人となるのである。

幼稚園は、1927（昭和2）年9月22日付で東京府知事平塚広義宛てに設置申請された後、正式認可された。東京都公文書館に残る認可関係の書類には、認可申請書に加えてさまざまな添付書類があり、その中には当時幼稚園の父兄であった藤倉是三からの6000円の寄付申込書もあり、小原が沢柳から厳命された外部からの寄付も無事に取り付けたことを証拠づけている<sup>(28)</sup>。

新しい幼稚園の園舎は小学校のとなり（現在の幼稚園とほぼ同じ位置）に建てられた。これは小林宗作が設計したものであるらしい。小林恵子は、成城幼稚園の保母であった奥寿儀の記憶による幼稚園の見取り図を紹介しているが、それを見ると、八角形のホールと呼ばれる遊戯室を中心に据えた、いわゆる「梅鉢型」の園舎であった<sup>(29)</sup>。これは明治40年代ごろから現れた「遊戯室中心の園舎建築の代表的なもの」<sup>(30)</sup> である。『幼稚園百年史』では、「この梅鉢型園舎配置はざん新な着想によるものであったが、遊戯室を各組が同時に使用する場合は良いが、交互に使用する場合に問題があること、園庭が細分されること、将来組数増加の場合の増築に不便なこと、などのため、このままの形では発展しなかった」と評している<sup>(31)</sup>。

### （3）成城幼稚園の実際と研究の精神

さて、成城幼稚園で行っていた保育について、年史でもさまざまなトピックが紹介されている。本節では、そうしたものを含めて紹介することで、成城幼稚園の実際の保育の一端を示すことにする。

まず、年史において特に強調されているのが、後に「幼稚園弁当」と呼ばれた給食である。認可前の段階では、「給食」とは言いながら、「つみ草をしてきた草や、野菜、うどん等を料理して食べさせた」<sup>(32)</sup> とあり、それが1929（昭和4）年から本格的な給食となったようである。『五十年』には次のように記述されている。

昭和四年からは成城幼稚園では給食をはじめた。佐伯栄養学校の卒業生黒瀬はる子と喜多川学子の二人が給食担当としてむかえられた。子どもたちは“幼稚園べんとう”といった。しかし、“幼稚園べんとう”を必ずたべなければならぬということはなく、自由だった。好ききらいのある子どもはそれがなおっていった。毎週水曜日は紅茶だった。“幼稚園べんとう”をたべない人も紅茶だけはたのしみにしてのんだ。昭和十四年まで“幼稚園べんとう”は続いた。<sup>(33)</sup>

当時の園児にとってもこの時間は非常に楽しみであつたようで、『六十年』には次のような思い出が語られている。

鮭のフライをみると、いまでも幼稚園弁当をなつかしく思い出すのですよ。ひとりひとり台所にお皿を持って行って、料理を入れてもらって、教室でたべました。献立はフライ、シチューなどが多かったでしょうか。週に二回ぐらいは紅茶の日もあつたようです。きれいなおかずは、裏の畠や藪の中にすてたことをおぼえています<sup>(34)</sup>

この「給食」は、思い出の中の献立を見ても明白なように、いわゆる現在の学校給食とは全く異なった性格のもので、当時最先端の家庭料理を子どもたちに食べさせるというものであつた。『六十年』によると、この給食に関わつたのは、当時幼稚園の父兄であつた白井喬二（大衆作家、本名は井上義道）の鶴子夫人で、彼女は当時最先端の栄養学の教授を標榜した佐伯栄養学校（現佐伯調理専門学校）の第一回卒業生であつた。彼女は前述の黒瀬と喜多川を代行者として彼女たちに直接作させたようである<sup>(35)</sup>。こうした試みができたのは、やはり成城幼稚園の父兄が、新しい教育を求めて大正自由教育の学校に子弟を入学させた新中間層に属していたことに起因するといえよう。彼等は、教育だけでなく、新しい生活習慣として、食事に対してもそれまで全く考慮されることのなかった「栄養」という面を重視しており、その点もまた、小林たちと考えを同じくしたのではないかと思われる。

このいわゆる食育に関しては、小林が非常に強いこだわりを持っていたらしい。彼は前述の「幼稚園教育の可否に就て」において、教育現場における栄養教育の必要について次のように述べている。

營養研究、花壇の花づくりをして見ても又兎や鶏の飼養をして見ても、營養に依つて甚しく發育状態の変化ある事實は誰人も疑ひない事である。これをついて見ても、幼年時代の營養の適否が一生の寿命と體質と氣質に関連するといふ事を、想像することが出来ると思ふ。故に、私は幼稚園で營養研究に基いたお弁当を食べさせ度いと思ふ。しかし私には学者のいふ營養研究を無上の物とは考へられない。だから三度の食事を毎回その營養食にすることは危険だと思ふ。私は家庭では自分の好む物に従ひ、園では学者の献立に依つて、食べさせ度いと思ふてゐる。<sup>(36)</sup>

こうした小林の考えが、どこまで反映されていたかは不明ではあるが、少なくとも当時としては珍しい、栄養を考慮した食事が給食として調理され、子どもたちに供されたことは確かである。しかもその食費は別建てであり、1935（昭和10）年ごろではひとり1食当たり12銭の食費を徴収していた<sup>(37)</sup>。

また、小林の代名詞であるリトミック教育や自然の中での子どもの自由な活動を保障する保育を重点的に行っていたことも特徴的である。1927（昭和2）年に赴任した奥寿儀は、小林の弟子であり、1925（大正15）年の夏に小林が牛込の成城で行った講習会に参加して以来、小林についてリトミックを学習し、成城幼稚園に赴任してからは小林とともにリトミック教育に従事した。また成城学園全体で、小林を中心としてリトミック教育の実践を行っていた。奥は、リトミック教育について「リズムによつて立つ芸術教育、すべての基礎になるもので、実にななる一つの新しい教育法」であると絶賛している<sup>(38)</sup>。このリトミック教育は、小林が退職した1937（昭和12）年以降は奥を中心に行われていた。日々の教育だけでなく、成城幼稚園を特徴づけるものとして捉えられていたようである。たとえば、1937（昭和12）年11月に成城学園をポーランド大使が視察することになった折り、幼稚園ではリトミックや自由遊びを紹介した<sup>(39)</sup>。また、おそらく1941（昭和16）年のものと推察される「第一、二句成城学園回報」において、幼稚園の記事として「奥先生ラヂオ放送（四月十五日午前十時より<sup>マ</sup>幼<sup>マ</sup>時の時間、リズム遊び 園児約十名」とあることを見ても、戦前において、成城幼稚園といえりトミック教育、というぐらいに内外に知られていたことがわかる<sup>(40)</sup>。

さらに、幼稚園では、自然に親しむ教育の一環として散歩が重視されていた。

その様子は、「幼稚園内では、室内では元気がない子供達も、お散歩に出かける  
と一番にとび出し、唱ひ、話し、はじめます」<sup>(41)</sup>と当時の保母が報告している  
ように、子どもたちがのびのびと過ごしていることがわかる。散歩だけでなく、  
保育自体が、保母たちの主導ではなくあくまで子どもたちの自由に任せたもので  
あった。

ところで、成城小学校創設以来の研究学校の伝統は、幼稚園にも多少ではある  
が生かされていた。1929（昭和4）年度には前年度から研究員として小学校に赴  
任していた大塚喜一が幼稚園の担当となった。彼は、「回顧一年」という文章で、  
次のような自己紹介をしている。

小生は元来幼稚園及それ以前の家庭教育に興味を持ち、京大理学部卒業後さ  
らに文学部に入つたのも幼児教育研究の為であつて、その間小生は人事関係  
に交渉の深い教育といふものを、学問上から研積して行くには、ぜひ教育な  
るものの体験を必要とすると思つた。<sup>(42)</sup>

特にこの大塚の幼稚園赴任は、園長あるいは主事以外には女性のみが幼稚園の  
教育に直接携わるのが当然であつた当時においては、非常に特異なこととして注  
目すべき点である。『五十年』には「女の教師にない所をおぎなつてもらう」と  
いう小林の考えでそのようになったと評しており、「子どもたちは大塚訓導とす  
もうをとったり、木のぼりをしたり、たのしい毎日だったという」と記してい  
る<sup>(43)</sup>。大塚については、1929（昭和4）年の父兄名簿には幼稚園の職員として  
記載されているが、もちろん正式には保母ではなく小学校訓導であつたはずであ  
る。現在では、もちろん男女関係なく幼稚園教諭となることができが、当時  
は1926（大正15年）の幼稚園令第9条に「保母ハ女子ニシテ保母免許状ヲ有ス  
ル者タルヘシ」とある通り、女性に限られていた。しかし、小林は幼稚園の教育  
にはその指導者として女性だけでなく男性の役割も大きいと考えていたようであ  
る。前述の「幼稚園教育の可否に就て」において、小林は幼稚園の教育と小学校  
低学年の教育の連絡をスムーズにすることの必要性を訴え、そのひとつの方法と  
して「幼稚園の小学が連絡のある学校では教師の勤務に就ても完全な連絡は出来  
ないものであらうか。保母兼訓導、訓導兼保母といふ様な制度にして、幼稚園の  
保母は小学校の低学年には或程度まで何等かの方法で関係していく」<sup>(44)</sup>ことを

考えていた。そのひとつの方法が、大塚の幼稚園赴任なのであろう。成城幼稚園では、大塚退職の後、小林を除いて男性の訓導が幼稚園を兼任することはないが、年度によって移動はあるものの、小林と奥が小学校兼任となっている。もちろんこれは小学校でのリトミックを担当していたと考えられるが、いずれにせよ小学校と幼稚園の兼任というのは、成城ならではのスタイルであろう。

このように、昭和初期における成城幼稚園は、小林の理想とする幼児教育が前面に展開されていた。小林は、幼稚園と小学校との連携を重視しつつも、「六才には六才の教育があり、三才には三才の教育がある。(中略)六才の子供に六才の教育を施す適当な幼稚園が」必要であると考えていた<sup>(45)</sup>。それが、リトミックを中心とした教育や子ども中心の生活であり、食育の重視であった。

小学校との連携という意味でいえば、幼稚園の卒園児はそのまま小学校へ入学が許された。1929(昭和4)年9月発行の『成城小学校』によると、その入学規定として、次のように記されている。

入学選考の方法は、原則として、本園幼稚部修了者、及び、現在在学児童の弟妹に優先権を与へ、その不足分を出願順によつて、心身の発育状態を調査して、普通の発達をしてゐる者を入学させる<sup>(46)</sup>

さらに、「経営、連絡、及び新学園に関する宣名書」には、幼稚園から小学校へそのまま入学させることについて「あまり幼小な子供に試験気分を知らせたくあるませぬのと、吾々にもまだ見当がつきませぬので、幼稚園から上る子供は全部小学部へ頂きます」とある<sup>(47)</sup>。

また、当時の学園の運動会のプログラムにも幼稚園の競技が組み込まれており(競技名は不明)、この段階で、幼稚園から高等学校までの一貫教育としての成城学園という姿が完成していたことがわかる<sup>(48)</sup>。

### 3. 小原事件後の幼稚園

このようにして、成城幼稚園は主に小原の「夢」の実現のために始まり、小林を中心としたリトミックという新しい保育の試みを行いながら、一貫教育の最初の段階としての道を歩んでいた。1930(昭和5)年からは毎年約60名の園児を抱え、

小規模ながらこのまま順当に進んでいくものと思われたが、1933（昭和8）年のいわゆる小原事件の衝撃はあまりに大きく、その後、財政だけでなく教育の面でも学園再建を余儀なくされた。その影響は、幼稚園にも大きく表れた。本節では、その時の学園再建に関わる史料から、幼稚園が当時どのように捉えられていたのか、そしてどのように改革しようとしていたのかを見て見ることとする。

まず、おそらく1934（昭和9）年に出されたであろうと推測される「成城学園財政整理案」と呼ばれる史料<sup>(49)</sup>によると、生徒募集人員の増加や授業料の値上げと並んで、「幼稚園ヲ廃止スルコト」との項目がある。この資料は、赤鉛筆で「未決案」とあるので、もちろんそのまま認められなかったであろうが、少なくとも幼稚園は敢えて必要とはしないという認識が、この時期の学園上層部にはあったのだということを、物語っていよう。

しかし、そうはいつても、「開設」されてから9年、正式に認可されてからも7年たつ幼稚園を一朝一夕に廃止するわけにはいかない。そこで、財政だけでなく各学校での教育改革に合わせて、幼稚園でも改革案が出されたようである。それが「幼稚園の希望」という史料に現れている。

まず、「幼稚園は女学部近くに移転し度い」と、幼稚園の移転を要求している。その理由として、次のことが述べられている。

幼年時代、混雑と雑音は無意味な疲労を来す。

性格の上にも悪い影響がある。故に附近を静かにしておき度い。

之が小学部から少し遠く離れ度い理由の一つ。

女学部の上級生には、幼児に関する知識を得せしめ、且つ幼児に親しましむる事は、有益なことと思ふ。

改築の時に際して実行され度い。<sup>(50)</sup>

これをみると、明らかに小学校に隣接することの悪影響を懸念していることがわかる。と同時に、この時期には小学校との連携というよりもむしろ幼稚園教育の独立を要望していたことが考えられる。さらに女子教育との関連も意識されていたことは、当時の成城高等女学校の性格から考えて、興味深いものがある。明治以降の女子教育の一つの傾向として、いわゆる「良妻賢母」の教育があるが、成城高等女学校はそれとはまったく別の性格を持っていたはずであるのに、学生

のころから幼児と親しむことに対して「有益なこと」と認識していたということは、成城高等女学校の方向性を変える可能性を持っていたと考えられる。

また、「教育方針に特に加えられたいこと」として、「忍耐 規律 自治 尊敬」を挙げ、「特に式場の礼儀を改めてほしい」と記載されている。<sup>(51)</sup> さらに「成城の子供は幼稚園から高等学校まで我まゝな点があるから、むじやきはよいが、すなほにしたい」「子弟間が親密すぎて礼を失すると思ふ。此間の礼はあるべきものと思ふ」と、まるでそれまでの自由な教育に逆行するような記述までである<sup>(52)</sup>。

このことは、沢柳の死後、小原の強い影響下にあった成城学園全体に対する批判と見ることができるのではないかと。特に、成城学園に通う子どもたちに対して、師弟間の礼儀のなさ、わがまま勝手な振る舞い、忍耐のなさなど、実はかなり目に余るものがあり、それを幼稚園からは正させていきたいという希望があったのではないかと推察できる。

そうした小原への批判に関する言及は、高等女学校の教員であった上里朝秀、細井次郎の執筆した「成城教育改革私案」に強く表れる。この文書は、高等女学校の改革についてのものであるが、明らかに学園全体のことを念頭に置いた記述となっている。

上里たちは、初期の成城教育の意義を高く評価する一方で、拡張後の学園について「トモスレバ、教育ノ研究的方面ニ努力ヲ欠キ、又文化ノ進足スルコトニ於テ多少ノ懈怠ガアツタノデハナイカ」<sup>(53)</sup>と指摘する。さらに、これからの成城学園のあり方として、「此ニ於テ今後更生スベキ成城教育ハソノ根本精神ハ沢柳先生ノ主張セラレタル教育ノ大道ニカナヒ、個性尊重、自学自習、全人的教養ヲ眼目トスルコトニ於テ、確固タルモノアラシムルト雖モ（中略）徒ラニ成城教育ナル空名ノ下ニ他ヲ顧ミザル一種ノ教育ニ終始スベキデナイ考へ」、「成城設立ノ精神ニ鑑ミ、外ニ対シテハ日本ニ於ケル教育実験所トシテ昔日ノ信ヲ挽回シタイモノデアル」と、非常に厳しい態度で臨もうとしている<sup>(54)</sup>。

また、学園全体の改革に関する史料からは、幼稚園が小学校と並んで「多分に実験的意味を有し」と確認していることがわかる<sup>(55)</sup>。もちろん、そうはいっても小学校においても学力の定着がなっていないことを指摘しており、各学校における改革の焦点は、体育や訓育と並んで学力の向上にしていることは非常に



興味深い。

とはいえ、結局幼稚園は、その後も廃止されることも移転することもなく、これまで通りの保育を続けていたようである。ただ、1937（昭和12）年3月に主事であった小林宗作が自由が丘学園（後のトモエ学園）設立のために退職<sup>(56)</sup>すると、後任の主事は小宮巴が小学校と兼任したが、実質的な保育は奥寿儀が中心となってい、彼女が退職した後は、昭和12年に赴任した弥富綾子を中心となったようである。『五十年』の記述によると、その時期の幼稚園のトピックとして、1937（昭和12）年度の週替わり担任制ともいうべき試み（教師たちがクラスを続けて受け持つために「その教師のくせが子供につよくえいきょうする」弊害を予防するために週ごとに組を取り換える試みを行っらしい。ただし、「なんとなく子供も教師もおちつかない」ため、1年で廃止された）や、遠足（1938（昭和13）年）、園舎建て替え（1939（昭和14）～1940（昭和15）年）、三年保育の試み（1942（昭和17）年）などがあったようである（553～555頁）。その後、戦争が激しくなったために休園命令を受けて1944（昭和19）年6月に休園を余儀なくされた。さらに1945（昭和20）年5月25日の大空襲により園舎は全焼する。戦後の幼稚園の再開は、1946（昭和21）年1月であった<sup>(57)</sup>。

## おわりに

以上、成城幼稚園について、設立から小原事件後戦前の時期までを述べてきたが、最後に、大正自由教育の潮流の中に置き直して考えてみたい。

明治後半から大正期にかけての全国的な幼稚園教育の変化というのは、フレール主義を直輸入した保育方法、画一的な保母主導の保育から、自由な子どもたちの活動を前面においた保育に移行しつつあった。そして『幼稚園教育百年史』の記述にある通り、「明治末期、特に四十年前後からは、（中略）次第にいろいろな試みを取り入れられ始めた。すなわち、欧米に起こった児童中心主義や生活主義は、いわゆる自由教育、統合主義保育となって、それに続くモンテッソリー教育法とともに、幼稚園のなかに入ってきた」<sup>(58)</sup>のである。さらに、明治末期にはすでに、「幼稚園と小学校との連絡、幼稚園経由児童と他の児童との比較、幼

幼稚園經由児童の学業成績、独立幼稚園と附設幼稚園の比較などの研究調査が行われており、現在の指導要録の趣旨のようなものの必要性が提唱され<sup>(59)</sup>るなど、いわゆる幼稚園教育における様々な研究が各地の幼稚園で行われていた。その結果が1911（明治44）年の小学校令および施行規則の改正に現れ、ますます自由な保育を可能にしたのである。

すなわち、初等教育においては、世界的な新教育運動や日本の大正自由教育の運動によって子ども中心主義の教育が模索されていながら、国民教育として画一的な教育から逃れることが難しかった一方で、保育の世界では、欧米発の新しい保育方法や初等教育における大正自由教育の影響によって、幼稚園の日常に新しい保育の模索がなされ、バラエティーに富んだ、子ども中心主義による保育が展開されていたのである。

しかし、残念なことに、この時期には幼稚園に子どもを通わせるという発想が保護者たちの中にほとんどなかった。全国の子どもの就園率は、「大正十年には三%」、「戦前の最高は昭和十六年の一〇・〇%」<sup>(60)</sup>という、ごく一部の層に限られていた。

そういう中で、成城幼稚園の位置付けは、あまり大きいとはいえない。ただでさえ、大正自由教育が都会の新中間層というごく限られた層のみの出来事であった上に、その中での幼稚園というのは、どうしても、当時の自由な保育の潮流の中ではインパクトは小さくならざるを得なかったことは否めない。

しかも、成城学園の場合、沢柳が全国の初等教育の改革を目指して成城小学校を創設したところと異なり、そうした改革とは全く別個の関心から始められた幼稚園は、必然的に学園内での比重も小さくならざるを得なかった。研究という点でいえば、確かにリトミック教育という当時新しい保育の方法が試みられていたとはいえ、それが幼稚園教育全体にまで影響を与えたとは考えにくい。事実、結局のところ、小林にせよ奥にせよ、後に自分の理想とする幼稚園なり小学校なりを作るために成城を去り、彼らの後継者は成城からは生まれなかったのである。また、最初期に大塚喜一が赴任したことで、幼稚園教育の研究も可能となったが、そうした研究を積極的に行う人材がその後出なかったのは、非常に残念であると同時に、それが成城幼稚園の現実であったと言わざるを得ない。そういった存在

であったから、小原事件の後の学園再建の時に、廃止論も出たのであろう。

しかし、成城幼稚園は現在に至るまで成城学園の校風の最もコアな部分を受け継ぎ初等学校との緩やかな連携を保ちつつ現在に至っている。

また、研究という点では、1983（昭和 58）年 6 月に当時成城幼稚園の園長であった横山昭作によって『幼児と教育』という年度ごとの実践記録をまとめた研究誌が創刊された。本誌は不定期に毎年発行され、2001（平成 13）年 3 月発行の第 9 号まで発行されたことが確認されている。本誌は、創刊号の「まえがき」に横山自身が述べているように「あまり大げさに構えないで、何か「実践記録」をまとめてみよう」<sup>(61)</sup>というのが主旨である。しかし、その本音は第 6 号の「あとがきにかえて」における横山の次の文章にあるのではないだろうか。

幼稚園が成城一貫教育の第一歩を担当する重要な位置にありながら、ともすれば学園内の離れ小島、あるいは成城教育のアクセサリ的色彩が全くなかったとは言い切れない。もちろん幼稚園自体がそんな風に思っていたわけではない。だが他からはそう思われているふしもあった。まことに不本意なことである。

このことを解消するには、幼稚園自らが、あらゆる場を通して学園各部にアピールするのが必要と私は考えた。だから、幼稚園教諭は出来得る限り学園内の研究会や集会に出席することを勧めた。

研究の面では年に一回、幼稚園教育実践の記録をまとめることを提案し会議の賛同を得た。こうして発足したのが機関誌「幼児と教育」である。<sup>(62)</sup>

この文章は、横山のほとんど叫びに近い思いがあるように思われる。同時にこれは、そのまま成城幼稚園の学園内での位置付けを物語っている。その解消のためにすべき「研究」は何であるか。それは、横山自身が同じ文章の中で「わたしたち教育現場人の研究は、日常の実践活動から遊離してはあり得ない」<sup>(63)</sup>と述べている。そしてそれこそが、沢柳の求めた「研究」ではないだろうか。

2017（平成 29）年には、成城学園は沢柳政太郎が成城小学校を創設して百年を迎える。創設趣意に謳われた「研究を基とする教育」の伝統をいかに日々の実践で生かしていけるのか、今後とも見守っていききたい。

注

- (1) 小原国芳「小原国芳自伝 (2)」『小原国芳全集』第 29 巻所収、玉川大学出版部、昭和 38 年。251 頁。
- (2) 成城教育および沢柳の教育思想における「研究」というこのキーワードは、重層的な意味合いがあると思われる。この点については、稿を改めて述べることにする。
- (3) この点については、拙稿『成城学園の女子中等教育』（『成城大学共通教育センター論集』第 6 号、2014 年）を参照されたい。
- (4) なお、成城幼稚園に関する先行研究として、小林恵子「リトミックを導入した草創期の成城幼稚園」（『国立音楽大学研究紀要』13、1978 年）、福元真由美「1920-30 年代の成城幼稚園における保育の位相」（『乳幼児教育学研究』13、2004 年）が挙げられる。これらは両者とも、小林宗作のリトミック教育を中心に述べたものであり、小林の幼稚園教育論を知るには非常に参考となった。また小林宗作に関する評伝では、佐野和彦『トットちゃんの先生 小林宗作抄伝』（話の特集、1985 年）が成城幼稚園との関係について章を割いて紹介している。
- (5) 本稿において使用した小宮氏の史料は、『成城学園史料』として小宮氏自身が整理、製本して保存されている。平成 24 年 3 月に、『小宮資料目録』（成城学園教育研究所研究年報別巻、学園教育研究所、新垣恒明（当時東京高等専門学校非常勤講師、現成城学園教育研究所所員）解題執筆）が作成された。小宮氏について、あるいは小宮資料についての詳細は、同書の「解題」を参照されたい。本稿では、引用した史料は、目録の整理番号に従って「小宮資料（巻数）-（資料番号）」として表記することとする。
- (6) 中野光『大正自由教育の研究』黎明書房、教育名著選集⑥、1998 年、10 頁。なお初版は 1969 年。
- (7) 文部省『幼稚園教育百年史』1979 年、27 頁。
- (8) 同上。
- (9) 同書 9 頁。
- (10) 同書 511 頁。
- (11) 同書 141 頁。
- (12) 『成城学園五十年』1967 年、548 頁および『成城学園六十年』1977 年、141 頁。  
 実は、『五十年』では、通史と部局史で記述が揺れている。部局史では「成城学園につとめている職員の子弟、五、六人」（548 頁）となっているが、通史の方では「付近の幼児六名」（64 頁）となっている。父兄名簿は 1925（大正 14）年度から現存するが、幼稚園が 1927（昭和 2）年に正式に認可されて後、1929（昭和 4）年より以前の名簿には幼稚園の項目自体がない（教職員の項には、金子宗作（小林から改姓）の名はある）。これはこの当時の成城幼稚園が正式に認可される以前なので、全くプライベートなものとして認識されていたのかもしれない。ただし、小原は、当時「学園村」として成城学園の教職員を熱心に誘致しているようなので、「付近の幼児」も「付近に住んでいた教職員の子弟」だったとは推測される。
- (13) 彼は、正式には金子姓となるが、普段は小林姓で通っていた。先行研究においても

「小林」となっており、本稿においてもそれを踏襲する。

- (14) 小原国芳「わたしたちの幼稚園」『教育問題研究・全人』第 21 号、1928（昭和 3）年 5 月、33 頁。
- (15) 同上。
- (16) 小原国芳「玉川から」『教育問題研究』第 63 号、1925（大正 14）年 6 月、74 頁。
- (17) 同上 75 頁。
- (18) 前掲小原「わたしたちの幼稚園」33 頁。
- (19) 小林宗作「幼稚園教育の可否に就て（その一）」『教育問題研究・全人』第 33 号、1929（昭和 4）年 4 月、64 頁。引用文中（ ）内は当時のまま。
- (20) 同上。
- (21) 中野光「解説（四）澤柳政太郎の学校論」『澤柳政太郎全集』第 4 巻、成城学園・澤柳政太郎全集刊行委員会編、国土社、1979（昭和 54）年、476 頁。
- (22) 「澤柳政太郎私家文書」「成城小学校〔児童数・収入予測〕」（1251）および「成城小学校経費予算」（1252）。番号は、『澤柳政太郎私家文書目録』（『成城学園教育研究所研究年報』別巻、2002（平成 14）年 3 月）の整理番号による。
- (23) 同上『澤柳政太郎私家文書目録』「解題」215 頁。執筆は小国喜弘。
- (24) 小原前掲「わたしたちの幼稚園」、36 頁。
- (25) 同上。
- (26) 前掲 37 頁。
- (27) 小原国芳「学園小史」『教育問題研究・全人』第 21 号、22 頁。
- (28) 「成城」№338、東京都公文書館蔵。なお、『五十年』には寄付金に関して具体的には記述されていないが、「父兄の藤倉氏や岡田氏の御厚意で建築がはじめられ」とある（549 頁）。この「御厚意」の一端が 6000 円の寄付ということであろう。
- (29) 小林恵子「幼児教育者としての小林宗作 [2]」『日本保育学会大会研究論文集』（32）、1979（昭和 54）年。なお小林は、「この建物は、ユニークな建て方と評されたが、ホール中心の「梅鉢型幼稚園」などからヒントを得たのではないかと指摘している。『六十年』の記述（「ホールが中心にあり、まわりに保育室をおくという当時としては斬新なものであった」142 頁）への批判であると思われるが、おそらくその指摘は正しい。
- (30) 前掲『幼稚園教育百年史』183 頁。
- (31) 同上 185 頁。
- (32) 『五十年』549 頁。
- (33) 同上 550 頁
- (34) 『六十年』142 頁。藤江房子氏の思い出。
- (35) 同上 141 ～ 142 頁。
- (36) 小林宗作「幼稚園の可否に就て（その二）」『教育問題研究・全人』第 34 号、昭和 4 年 5 月、78 頁。
- (37) 小宮資料 10-150「授業料其他覚表」の記述による。これは、その年の授業料を始めとする学納金の一覧表である。何年のものであるかは本史料だけでは明らかではない

- が、前後の史料からおそらく昭和10年のものと推察される。幼稚園では、授業料72円、入学金5円のほか、幼稚園独自の費用として1食当たり12銭の食費に加えて「おやつ、遠足費」として年額18円が徴収されていた。
- (38) 奥寿儀「好きなりトミック」『教育問題研究・全人』第35号、1929（昭和4年）6月、99頁。
- (39) 小宮資料55-63「ポーランド大使歓迎の件」の中の「歓迎式の次第」による。
- (40) 小宮資料11-145「第一、二句成城学園回報」による。本史料には、鉛筆書きで「16.4」とあることから（おそらく小宮自身が書いたものであろう）1941（昭和16）年4月であると推定できる。
- (41) 山内千代子「小さい祈り」前掲『教育問題研究・全人』第35号、101頁。
- (42) 大塚喜一「回顧一年」前掲『教育問題研究・全人』第35号、94頁。
- (43) 『五十年』549～550頁。
- (44) 小林前掲「幼稚園教育の可否に就て（その二）」72頁。
- (45) 前掲71頁。
- (46) 『成城小学校』1029（昭和4）年9月。
- (47) 小宮資料10-1「経営、連絡、及び新学園に関する宣名書」。
- (48) 小宮資料10-20「運動会プログラム」。
- (49) 小宮資料17-19「成城学園財政整理案」。史料に年号はないが、この史料が綴じられた『学園史料17』は背表紙に「諸規定草案」とあり、前後には小原事件後の学園再建に関するさまざまな草案をまとめている。本史料の中にも1935（昭和10）年度からの変更点に関する記述があるので、明らかにこの「整理案」は1934（昭和9）年のものといえる。
- (50) 小宮資料56-3「幼稚園の希望」。
- (51) 同上。
- (52) 同上。
- (53) 小宮資料56-5「成城教育改革私案」。
- (54) 同上。
- (55) 小宮資料56-6「改革事項」。
- (56) 小宮資料55-50「昭和12年4月15日学園評議員会」に「幼稚園金子宗作氏自由が丘学園に転任の件」の報告がある。
- (57) 小宮資料12-37「各学年度別学級数・定員数在籍生徒取調 各学科別教職員数」によると、幼稚園については備考欄に「休園中 二十一年一月より開園」とある。このことに関連して、『五十年』には、全焼した園舎に代わり、「女学校の食堂をかしてもらって保育をはじめることにした」が、「どうしても部屋がせまいというので昭和二十一年（一九四六）一月、東宝得撮映所の近くにあった中野達氏所有の元大東塾の建物をかりて保育をすることになった」とある（557頁）。
- (58) 前掲『幼稚園教育百年史』141頁。
- (59) 同書143頁。

- (60) 同書 26 頁。
- (61) 横山昭作「まえがき 一歩でも前進を」『幼児と教育』第 1 号、成城幼稚園、1983（昭和 58）年 6 月、1 頁。
- (62) 横山昭作「あとがきにかえて」『幼児と教育』第 6 号、成城幼稚園、1989（平成元）年 3 月、91 頁。
- (63) 同上。

## 謝辞

本稿を執筆するに当たり、成城学園教育研究所の皆様には、「小宮資料」をはじめとする貴重な史料の閲覧等の面で大変お世話になりました。本稿は、教育研究所の史料なくして成立しませんでした。ここに特に記して、感謝申し上げます。